

## 本学看護学生の看護職への態度に関する調査

川崎医療短期大学 第二看護科

林 喜美子 高橋 美月 松本 明美

(昭和62年8月21日受理)

### A Study on the Student Nurses' Attitude toward their Profession

Kimiko HAYASHI, Mituki TAKAHASHI and Akemi MATSUMOTO

*Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions  
Kurashiki 701-01, Japan  
(Received on Aug. 21, 1987)*

**Key words:** 看護学生, 看護職, 態度, 適合性

#### 概 要

本学にある二科の看護科学生について、岡本・松本ら(1976)の「進路選択状況調査」による調査票を使って、看護職の態度に関する実態を調べた。入学前・現在・卒業後の時点で条件を想定し、看護職への態度適合性に関係する項目は、岡本ら<sup>1)</sup>の結果と比較して本学の特徴をみた。進路選択に対する評価、適合性、職業イメージなど比較した項目の多くで類似した結果であったが、本学の方が全体的には良い、肯定的、合っているなどの比率が高かった。看護を学ぶという目的の明確さを、受験時の進路選択状況の違いを一つの視点として適合性との関連をみた。現在の進路に対する評価、生活の満足感、適合性において、受験時看護学校だけ考えていた者(A群)が他の進路も併せて考えていた者(B群)に比べて有意の差があった。1Nと2Nの間には、高校普通科卒業と衛生看護科卒業という対象の必然的違いによる影響はみられたが態度全体での大きな差はなかった。

#### はじめに

看護教育を受ける学生は青年期にあり、職業を選択し準備する、という課題がある。本学は短期大学の看護教育機関であり、専門職を目指した教育が重視されている。社会一般の価値観、職業観等の変化に伴い、本学入学生も看護職になるという目的意識の明確な者ばかりとは言えなくなってきたのを、学生との関係を通して実感的に把握している。今回、岡本・松本ら(1976)の「進路選択状況調査」による調査票を使って、看護職の態度に関する実態を知り、目的の明確さを受験時の進路選択状況の違いを一つの視点として適合性との関連をみたので報告する。

#### 1. 研究方法

表1 調査対象

課程 \ 学年	1年	2年	3年	計
第一看護科(1N)	58人	57人	47人	162人
第二看護科(2N)	51人	59人		110人
計	(109人)	(116人)	(47人)	(272人)

アンケート回収率100%

調査対象

昭和60・61・62年度本学第1看護科入学生162人と61・62年度第2看護科入学生110人以下第1看護科を1N、第2看護科を2Nと記す。

調査期間

昭和62年7月1日から7月3日

調査内容の主なもの

調査内容の設問項目は、主に岡本・松本らの「進路選択状況調査(1976)による調査票」を用いた。

- (1). 学生の背景
- (2). 看護学校入学時の状況

- ①入学決意の時期
- ②他の進路との関係
- ③周囲の反応

- (3). 看護職に対する態度

- ①進路選択に対する評価
- ②看護職の適合性
- ③自分の子供に対する態度
- ④聖職観
- ⑤看護婦の職業イメージ

- (4). 現在の生活

- ①看護学生である誇り
- ②生活の満足感
- ③生活の中で重視している事柄

- (5). 将来の計画

- ①卒業後の進路予定と聖職観
- ②職場選択の基準

II. 結果

- (1) 学生の背景

1 Nは、96.3%の者が高等学校普通科の卒業であり、2 Nは81.8%が衛生看護科の卒業生で

図1. 年齢構成

1N (162) 人	18歳 (26.5%)	19歳 (29.0%)	20歳 (28.4%)	21歳 (11.7%)	22歳 (2.5%)
				23歳 0.6%	
				30歳 0.6%	
				NA 0.6%	
				NA 0.9%	
				23歳 0.9%	
2N (110) 人	18歳 (26.4%)	19歳 (46.4%)	20歳 (16.4%)	21歳 (5.5%)	22歳 (13.6%)

ある。出身地域は76.7%が中国地方からである。年齢は、1 Nでは19歳が最も多く29.0%で2 Nは、19歳が46.4%が一番多い。

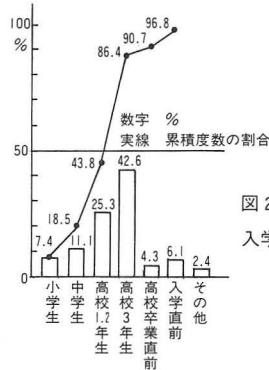


図2. 入学決意の時期(IN)

- (2) 看護学校入学時の状況

- ①入学決意の時期

看護学校へ入学しようと思った時期は、1 Nでは「高3—(42.6%)」が最も多く、次いで「高1—2 (25.3%)」で高校入学から受験までの間にほぼ10人のうち3人が、看護職への進路を決意している。高校入学以前に看護学校への進学を意識している者は、ほぼ10人に2人である。また、高校3年の時点までに決意している者は87%である。岡本らの調査でも類似の結果を報告している。

- ②他の進路との関係

受験時の進路予定を示したのが表2である。

表2 受験時の進路予定

	1 N	2 N
看護学校だけ(本学以外の大学短大も含む)	102(63.0)	88(80.0)
他の進路		
大学	33(20.4)	7( 6.4)
短大	21(13.0)	2( 1.8)
各種学校	3( 1.8)	9( 8.2)
就職	2( 1.2)	3( 2.7)
無回答	1( 0.6)	1( 0.9)

( )内は%

1 Nで他の進路として考えていた大学・短大の学部は、教育学部、英文学部、薬学部等で医療に関係ない方面が多い。2 Nは、歯科衛生士、臨床検査技師、作業療法士等で医療関係の学校が多い。実際には、他の進路へは進まなかった理由として1 Nは「看護婦の方がよいと思った」「他の職種は就職難だから」「不合格だった」が主なもので、2 Nは「看護婦免許を取りたかった」「両親や先生の勧めで」「学力が足りない」であった。肯定的な理由としては、免許を持つ

て働ける就職の有利性を考えており、否定的理由では学力の不足が挙げられる。

③周囲の反応

看護学校受験に対する身近な人達の反応を「賛成」か「反対」かで尋ねたのが表3である。

表3 周囲の反応(身近な人達)

	賛成率%	反対率%
父	1 N 58.6	10.5
	2 N 70.0	7.3
母	1 N 71.0	12.3
	2 N 80.0	7.3
周囲の大人	1 N 56.8	9.3
	2 N 76.4	8.2
担任の先生	1 N 67.9	5.6
	2 N 84.5	6.4
友人	1 N 64.8	3.7
	2 N 79.0	3.6

賛成率が高いのは1N-「母」「担任の先生」「友人」の順で2N-「担任の先生」「母」「友人」の順である。賛成率は1Nに比べて2Nが相対的に高い。一方反対率は1N-「母」「父」2N-「周囲の大人」「父と母」の順に高く、賛成反対を示しながら大きな影響を与えているのは、1Nは母であり2Nは担任の先生である。岡本ら(1976)の報告でも類似の結果である。

次に、医療や看護に関係している人が身近にいた場合の反応をみたのが表4である。「ほとんど

表4 周囲の反応

(医療や看護に関係している人達)

	1 N	2 N
いないので分からない	61(37.7)	41(38.3)
ほとんどの人が賛成	61(37.7)	42(39.1)
賛成の方が多い	22(13.5)	21(19.2)
賛成・反対が半々	12(7.4)	3(2.7)
反対の方が多い	6(3.7)	1(0.9)
ほとんどの人が反対	0	0
NA	0	2(1.8)

( )内は%

ど賛成」と「賛成の方が多い」を肯定的反応「ほとんど反対」と「反対の方が多い」を否定的反応としてみると、1Nは「肯定(82.2%)」「否定(5.9%)」で2Nは「肯定(91.3%)」「否定(1.4%)」となっている。

多方面への進路選択が可能である1Nに否定的な反応を示した者がやや多いが、全体では約8~9割が促進的な反応をしている。

(3) 看護職に対する態度

①進路選択に対する評価

今振り返ってみて、進路選択はどうであったと思うか、に対する回答を示したのが表5である

表5 進路選択に対する評価

( )内は%

	1 N	2 N
間違っていなかったと思う	58 (35.8)	41 (37.3)
まあ大した間違いはなかった	46 (28.4)	42 (38.2)
色々問題はあったようだ	23 (14.2)	9 (8.2)
間違っていたと思う	4 (2.5)	8 (7.3)
分からない	31 (19.1)	10 (9.0)

る。「間違っていなかったと思う」と「まあ大した間違いはなかった」とを肯定的評価、「色々問題はあったようだ」「間違っていたと思う」を否定的評価としてみると「肯定的評価(1N-64.2%, 2N-75.5%)」で「否定的評価(1N-16.7%, 2N-15.5%)」である。「分からない」と判断に迷っている者が1N19.1%, 2N9.0%である。

岡本ら(1976)の結果と比べて「肯定的評価(69.8%)」は、大きな違いはないが「否定的評価(23.7%)」「分からない(6.9%)」は、本学1Nとの違いがみられる。看護に求めるものを期待しながら、現時点では見い出せず模索しているのではないかと考えられる者が本学1Nにやや多いと言える。

1Nについて、看護学校(本学以外の大学短大を含む)だけ考えていた者と、他の進路も併せて考えていた者に分けて、現在の進路に対する自己評価をみた。前者をA群後者をB群として比較すると「肯定的評価」をした者は、「A群-88.8%, B群-63.3%」でA群が有意の差で高い。 $(x^2=10.435 \quad P<0.005 \quad \phi=1 \quad A群 \gamma=102, B群 \gamma=60)$

進路選択を間違っていた、と答えた者が有意に高かったB群について、「看護職への適合性」6項目との関連をみた。「興味」「体力」「仕事観」「将来設計」の4項目でA群との有意差を認め、「学力」「性格」では有意差は認められなかつ

表6 適合性の評価

「適合性あり」と答えた者についてのA群とB群の比較

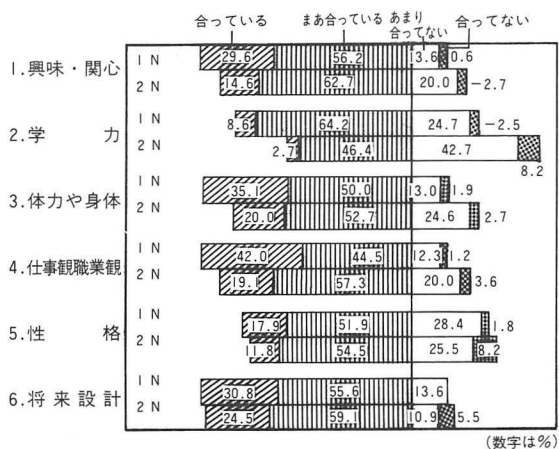
	A群	B群	カイ2乗検定
仕事観	93.1%	76.7%	$\chi^2=7.682$ $P<0.01$
体力	91.2%	75.0%	$\chi^2=6.604$ $P<0.01$
将来設計	91.2%	78.3%	$\chi^2=4.272$ $P<0.05$
興味	92.2%	75.0%	$\chi^2=7.774$ $P<0.01$
学力	73.5%	70.0%	$\chi^2=0.163$
性格	75.5%	61.7%	$\chi^2=2.831$

た。進路選択を間違っていたと答えた者は、学力が足りない、性格が合わないのではなく、看護職への興味が少ない、仕事観、将来設計、体力の面で合っていない、と感じている者が多いと言える。

## ②看護職の適合性

看護婦の仕事を「興味・関心」「学力」「体力・身体的条件」「仕事観・職業観」「性格」「将来設計」という6つの側面から、適合性を自己評価したのが図3である。

図3. 看護職の適合性



「合っている」という回答が多かったのは1Nは「仕事観(42.0%)」「体力(35.2%)」「将来設計(30.9%)」の順である。2Nは「将来設計(24.5%)」「体力(20.0%)」「仕事観(19.1%)」である。「合っている」と答えている上位項目は、どちらも「仕事観」「体力」「将来設計」であるが、1Nと2Nで「仕事観」の差が大きい。一方合っていない項目は、1Nは「学力(2.

5%)」「性格(1.9%)」「体力(1.9%)」で他の3項目も0~1.2%である。2Nは「性格(8.2%)」「学力(8.2%)」「将来設計(5.5%)」でどちらも同じ項目である。

「合っている」と「まあ合っている」を適合性あり、とし「あまり合っていない」と「合っていない」を適合性なしで分けてみると、6項目とも適合性ありが多い。1Nでは「仕事観」「将来設計」「興味」「体力」の4項目は、85~86%で「性格」「学力」も70~64%である。2Nは「将来設計(84%)」「興味」「仕事観」「体力」が73~77%、「性格(66%)」「学力(49%)」である。

自己評価の各項目を1N、2Nで検定してみると、「興味・関心」の点では1Nと2Nとの間に有意差はなく、「学力」ではほとんど適合と答えたもの1N72.8%、2N49.1%で有意差が認められる。 $(\chi^2=14.889$   $P<0.01)$ 「体力・身体的条件」では、適合性ありが1N85.2%、2N72.7%で有意差がある。 $(\chi^2=3.893$   $P<0.05)$ 「仕事観・職業観」で適合性ありが、1N86.4%、2N76.4%で有意差がある。 $(\chi^2=3.893$   $P<0.05)$ 「性格」「将来設計」の点で有意差は認められなかった。2Nの学生は、「学力」「体力」面で適合性がない、と評価している者が多いと言える。

岡本らの結果と比べてみると、適合性ありと適合性なしの項目は、本学学生と同じであるが、適合性ありとする者の比率が本学の方がやや高い。

## ③自分の子供に対する態度

自分の子供に看護職を勧めるか、という問に対する回答が表7である。1N、2N共に最も

表7 自分の子供に対する態度

	1N	2N
ぜひ勧める	23(14.2)	14(12.7)
一応勧める	38(23.5)	29(26.4)
どちらともいえない	78(48.1)	45(40.9)
あまり勧めたくない	22(13.6)	15(13.6)
決して勧めない	1(0.6)	7(6.4)

( )内は%

多いのが「どちらともいえない(1N—48.1%、

2 N—40.9%)」で次が「一応すすめる (1 N—23.5%, 2 N—26.4%)」である。3位は1 Nは「是非勧める」で2 Nは「余り勧めたくない」となっている。看護職に対して、よい評価をしていると考えられる者を「勧める」と回答した比率でみると、1 N37.7%, 2 N39.1%でどちらもほぼ5人に2人となっている。

④聖職観

「『看護婦は一般の仕事と違い尊い職業だ』という意見は、あなたの考えとどの程度一致していますか」の問に対する答えを「ほとんど一致している」「どちらとも言えない」「ほとんど一致していない」の3つから求めた。そして、「どちらとも言えない」という中間群を除いて検定したところ、「ほとんど一致していない」と答えた者が1 N5.6%, 2 N14.6%であり、尊い職業だと思っていない者が、2 Nに有意に高かった。(x<sup>2</sup>=5.659 P<0.05)

⑤看護婦の職業イメージ

看護婦の職業イメージを10の側面から「++ (良いイメージ)」から「-- (悪いイメージ)」の5段階で回答を求めた。その結果を「++」から「--」にそれぞれ1点から5点を与え、

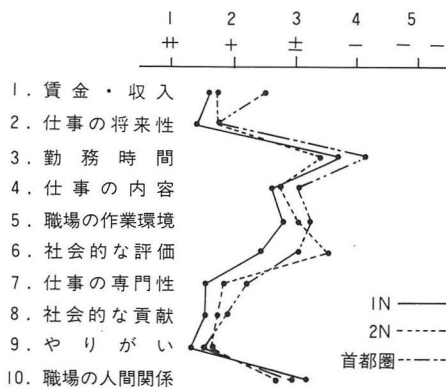


図4. 看護婦の職業イメージ

平均値を求め図式化したのが図4である。1 N, 2 N共に良いイメージのものは「賃金収入」「やりがい」「仕事の将来性」「仕事の専門性」「社会的な貢献」である。悪いイメージのものは、1 Nは「勤務時間」で2 Nはそれに「社会的評価」

が加わっている。1 Nでは「社会的評価」が良いイメージに近く、この項目が2 Nとの最も大きな差である。全体的には1 Nが良いイメージの傾向が強い。

両方のプロフィールは、岡本ら (1976) が首都圏在学生に実施した結果と、ほとんど変わらないが全体的に本学学生の結果が、プラス側が多い。「賃金・収入」「勤務時間」「仕事内容」「作業環境」「専門性」などに差がみられた。

(4) 現在の生活

①看護学生である誇り

「誇りを持っている」と答えた者は、1 N94.3%, 2 N84.1%である。両者の間で、誇りを持っている者の有意差をみると(x<sup>2</sup>=3.114 P<0.05) で有意の差がある。職業イメージ、聖職観とも併せてみると、1 Nが看護学生として自己を受け入れている者が多い。

②生活の満足感

現在の生活の満足感についてみると「満足し

表8 生活の満足感

	1 N	2 N
大変満足している	4 ( 2.5)	1 ( 0.9)
まあ満足している	71(43.8)	47(42.7)
どちらともいえない	35(21.6)	27(24.5)
あまり満足していない	47(29.0)	28(25.5)
全く満足していない	4 ( 2.5)	7 ( 6.4)
無回答	1 ( 0.6)	0(0.0)

( ) 内は%

ている」が1 N46.3%, 2 N43.6%で、「余り満足していない」1 N31.5%, 2 N31.9%である。全体的には満足している者が多く、1 Nと2 Nの差はほとんどない。

前出のA群とB群で比較すると「満足している」A群67.1%, B群49.0% (x<sup>2</sup>=3.436 P<0.05) で、看護学校だけ考えていた者が有意に高い。目的の明らかなことが、生活の満足感にも影響している。

③生活の中で重視している事柄

日常生活の中で重視しているものについて10項目から得た結果が図5である。回答結果の「どちらとも言えない」を中間群にして、「重視して

いる」「重視していない」の3分類にした。「重

たのが表9である。「子供が大きくなるまで」「一

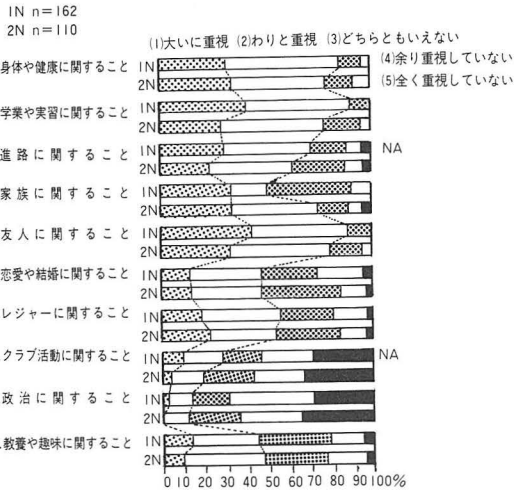


図5. 生活上重視していること

視している」項目で比率の高いものは、1Nは「学業や実習(90.1%)」「友人(88.3%)」「身体(85.2%)」の順である。2Nは「友人(80.0%)」「学業(78.2%)」「身体(77.3%)」である。

1Nは「学業」を重視している者が90%で最も多く、2Nは2位で78%である。一方「重視してない」は、1N、2N共に「政治(65~69%)」と「クラブ(52~56%)」である。全体的に個人の生活を重視しており、学校生活や社会参加への関心は低い。2Nの場合、先の適合性との関連でみると「学力」「体力」面での適合性が低い、という結果が出ているが、1Nに比べて「学業」の重視度が低い。学習意欲を高める教育方法、内容の検討をする必要があると思える。

(5) 将来の計画

①卒業後の進路予定と職歴観

卒業後の進路予定を「看護婦になる」「進学する」「その他・無回答」に分けてみると、卒業後、看護婦になる予定の者は1N67.8%、2N79.1%である。進学を予定している者は1N28.4%、2N11.8%で、主な進路は保健婦学校、助産婦学校、養護教諭養成課程である。卒業後「看護婦になる」と答えた者が、仕事の継続について具体的な目標を持っているかどうか、を尋ね

表9 職歴観(仕事の継続)

	1 N	2 N
何年か続ける	15(13.6)	19(21.9)
結婚するまで続ける	14(12.7)	17(19.6)
子供ができるまで続ける	12(10.9)	9(10.3)
子供が大きくなったらまた続ける	33(30.0)	13(14.9)
一生続ける	31(38.2)	14(16.1)
無回答	5(4.6)	15(17.2)
計	100(100.0)	87(100.0)

( )内は%

生続ける」を併せて、長期継続を考えている者とみると、1N58.2%、2N31.0%で、1Nの方が長期継続を考えている者が多い。この事は、看護婦の職業イメージの項で、1Nの学生の方が全体的に良いイメージを持っている者が多いこと、適合性の面からも、看護婦に合っていると自己評価している者が多い、という面との関連が考えられる。しかし、病院実習経験の有無など、1Nと2Nでは基礎条件が違っているので、この事だけでは決められない。

②職場選択の基準

看護婦として就職するとしたら、どんな条件

表10 職場選択の基準

	第1位		第2位		第3位	
	1 N	2 N	1 N	2 N	1 N	2 N
労働条件	85 (52.5)	62 (56.4)	58 (35.8)	36 (32.7)	17 (10.5)	10 (9.0)
学習条件	39 (24.1)	19 (17.3)	39 (24.1)	26 (23.6)	82 (50.6)	63 (57.3)
人間関係	36 (22.2)	27 (24.5)	63 (38.9)	46 (41.8)	61 (37.7)	35 (31.8)

( )内%  
無回答 1 N 2(1.2)  
2 N 2(1.8)

で病院を選ぶかを「労働条件」「人間関係」「学習条件」の3項目で、重視する順序を尋ねた。第1位の比率をみると、1N・2N共に「労働条件」で1Nは次に「学習条件」2Nは「人間関係」を挙げている。順序は岡本らの結果と同じであるが「人間関係(岡本ら)9.4%」に比べて本学22~25%で重視の率が高い。

### Ⅲ. まとめ

1)看護職への態度を、進路に対する評価、適合性、現在の生活、職業イメージ第の面からみたが、全体的には1Nと2Nとで大きな差はなかった。岡本らの主都圏の看護学生の結果と比べて、本学の方が良い、合っている、肯定的等の比率は高かった。

2)受験時に看護学校だけ考えていた者(A群)と他の進路も併せて考えていた者(B群)について、現在の進路に対する評価、生活の満足感、適合性との関連をみると、A群に有意の差があった。(1Nの場合)A群の者は、現在の進路に対して、間違っていなかったと評価している者が多く、生活への満足感も高く看護職への6つの側面のうち興味、仕事観、体力、将来設計の面で適合性が高くなっている。

3)全体的には、現在の生活に満足している者が多く、1N・2Nの差はほとんどない。学業が実習、友人、身体といった個人の生活を重視しクラブ、政治など学校や社会への関心は低い。

4)職業イメージについても1N・2N共に良いイメージが多く、岡本らの結果と比べても本学の方がプラスの側に多い。収入、やりがい、将来性、専門性、社会的貢献は良いイメージで1Nと2Nで最も大きな差があるのは社会的評価である。

### おわりに

本学看護科学生の看護職の態度に関する実態を大まかに知ることは出来たが、設問項目の不備もあって、1Nと2Nの特徴をとらえて考察することは出来なかった。また、今回は各学年間の違いをみていないので、入学後の教育過程で身につけていくと考えられる適性態度の変化をみることは出来ていない。今後、入学前入学時卒業時と大きな区切りの時期をとらえて縦的にみることで、態度形成の変化を知り、対象に適した教育内容方法等の検討資料を得たいと考えている。

### 引用文献

- 1) 岡本英雄, 松本純平: 進路選択状況調査報告—看護学生の進路選択と進路設計. 日本看護協会調査研究誌 報告No.4 1976

### 参考文献

- 1) 山本よしゑ, 他: 看護学生のアイデンティティ形成過程. 第16回日本看護学会集録誌 140~142 1985
- 2) 松本光子, 他: 看護学生の進路決定過程について. 看護教育 Vo.13 No.1 54~58 医学書院 1972

